

《WHAT IS (an) ART?》 (夜さろん第10夜) @ 原宿 / 参加者8名

こんばんは。夜さろんへようこそ。今宵のMENUは《WHAT IS (an) ART?》です——。

- 哲学カフェで行われる哲学対話では話者の考えや価値観に影響を受け合いながら、つぎつぎに別の話者が少しずつ異なる考えや価値観を語っていきます。そのような対話のなかにわざわざ“アート”を仲介させることで、遠回りをしているようで、でも、アートの持つ表現の力に助けられて話者の価値観や個性、そして言語化されることに抗う“なにか”を零れ落とすことなく相手に届けることはできるでしょうか？
- アートには現にどんな役割が期待されているのでしょうか？ わたしたちが持ち寄ったそれぞれのアートには、いったいどんな期待が寄せられているのでしょうか？ 個々のアートはどんな役割をになっていると考えられるのでしょうか？
- 参加者ひとりひとりの語りからも明らかのように、アートには個人に寄り添い励ますというレベルの力があるようです。しかし、より広い、社会や時代に対してできることがあったりはしないのでしょうか？ アートには変化をもたらすなんらかの力があるのでしょうか？
- アートがもっている力について考えてみたいとおもいます。対話しながらその力を言葉にしてみます。そもそも、アートとはなんなのでしょうか？ アートとアートでないものの境界線についてどんなことを考えることができるのでしょうか？

INDEX.

1. “アート”という言葉から想像する本・モノ・コトを何かひとつお持ちください。それについて、みなさん順番にご紹介ください。
2. 上記を起点として、みなさんのなかにある“アート”の原風景をゆっくりと遡る、そういう対話をしたいと思います。
3. 最後にブック交換会をします。交換したい本を一冊ご用意ください。ラッピングやカードはご自由にどうぞ。

【ブック交換会】キーワード

かけら	『使いみちのない風景』村上春樹(中公文庫、1998) 『センネン画報』今日マチ子(太田出版、2008)
ドイツ、ベルリン	『傘の死体とわたしの妻』多和田葉子(思潮社、2006)
MA/YO	『キューピーのマヨネーズレシピ』キューピー株式会社監修(主婦と生活社、2012) + キューピーマヨネーズ
おおらかに生きるために、捨てる！	『人生十二相 おおらかに生きるための「捨てる！」哲学』辰巳渚(イースト・プレス、2013)
真実、疑問、愛(いと)おしさ	『わたしを離さないで』カズオ・イシグロ(ハヤカワ epi 文庫、2008)
「半歩先の」過去	『ザ・ナウ・アート・ブック —世界50人アーティストの作品とメッセージ』ヴァルデマー・ヤヌジャック監修(光琳社出版、1996) + イチハラヒロコの紙バック
お疲れ様でした	『タモリ論』樋口毅宏(新潮新書、2013)
地平線	『マンガ童話』長新太(トムズボックス、2006)

“My energy comes from freedom and a rebellious spirit.” —Rei Kawakubo

“芸術と科学はガラスの表と裏のようだ” —中谷宇吉郎

“Do we love without thinking? Do we do the right thing without thinking?” —Arto Lindsay

【“わたしのアート”紹介】

	おなまえ	紹介いただくアート(本・モノ・コト)	もっている力(キーワード)
1	FN さん	【『子どもの詩集 たいようのおなら』灰谷健次郎:編集・長新太:イラスト(のら書店、1995)】 「たいようがおならをしたので/ちきゅうがふっとびました/月もふっとんだ/星もふっとんだ」——子どもたちの飾らないことばとやさしいまなざしがいつぱいの、豊かな感受性にあふれた詩集。この詩集の中にこめられた、純粋な発見や衝動に“わたしの中になかったもの”を感じるという。紹介者にとってそれは“わたしの価値観がくつがえされる”という体験で、それこそが紹介者がアートに求めている大事なコトのひとつ、と語った。	“そう来たか!” “存在として興味深いもの”
2	FLOWER さん	【花(創作(アート)の素(もと)になったり、アートそのもの、にもなったり)】 テーブルにクロスを引き、持参したコップに水を入れた上で生花をいけた。そこにご自宅の庭で朽ちて落ちた薔薇の花弁を散らす——。 自然界に存在する花は、創造や創作の“素となるもの”と紹介者は語る。自然物なので厳密にはひとが作ったものではないが、“だからこそよくできている”とも。咲き誇った花は必ず枯れていく。その“キレイなだけじゃない”ところこそ、アートにつながる奥深さが潜んでいるのではないかと。アートが必ずしも制作物とは限らない、そういう示唆を与えられた。	“変化” “素材でもありながら完成品”
3	だいすけZ さん	【当日までのひみつです】 紹介者は弦細工のような小箱のなかからおもむろに一本のボールペン——これといって特徴のない——を取り出す。「このボールペンには1000万円の価値があります。あなたが望むのならこれを100万円ですべて買って上げましょう」。 原価でいえば一本80円のボールペンに、こういう現象(言動)が重ねられるのはいったいなぜでしょう。“レディメイド”という単語や“デュシャンの泉”などが思い浮かぶひともいるかもしれませんが。アートの“価値”はいったい誰が決めるのでしょうか(そもそもアートの価値って?)。既製品が(言葉ひとつで)アートになってしまうものなのでしょうか。	“(アートの)価値” “決める/決まる” “既製品?”

4	M さん	【憧れと情熱】 紹介者はご自身の幼少時の思い出の品とそれを記録した母親のノートを持参。“小さい子どもが表現するもの、認められたいとか売りたいというということではなく、もっと衝動的に行われる”行為として表現されたものに、アートを感じると話す。たとえば、姉の持ち物の憧れて5歳児が無我夢中で作り上げた手製の人形——決して上手ではないそれには、売り物にはあり得ない大切な“なにか”が籠められている、それを見る度に思い出すことのできる記憶と一緒に。この記録を遺したノート——母親という存在にも多くの示唆的なものを感じる紹介となった、	“初期衝動” “純粋な表現” “キオウトキログ”
5	OKN さん	【「アート」難しい。難しいので色々持っています】 “美術館に展示されているものがアートなのか? 言葉や音楽もアートなのではないか? アートには(アートとそうでないものを区別するような)レベルが存在するのか?”という疑問を語ったあと、『ねじ式』(つげ義春)との出会いが衝撃的だった、というところから紹介者の話は始まった。そして『人はなぜ「美しい」がわかるのか?』(橋本治)への言及を挟みつつ、高校時代に学級で流行したサラエボちゃんというキャラクターの存在、そして学級文集でみなが思い思いにサラエボちゃんを盛り込んだマンガ・イラスト集(のようなもの)を制作したのだと、実物を紹介しながら語った。あるアートが次々にコピーされてクラス中を巻き込んでいく勢い、なにがそこまで魅力的だったのかなど、アートの持つ熱気に巻き込まれた体験を含めて、アートの魅力がどんなところにあるのかについて実に熱っぽく紹介いただいた。	“勢い/伝染性” “模写・複製” “ムーブメント/流行”
6	T さん	【まだ思い浮かんでいません】 当日までのあいだ、会から出されたお題「“わたしのアート”紹介(本・モノ・コト)」について思案したが、「なにも思い浮かばなかった」と語るに留まった。ここでわれわれはあらためて考えることとなる。つまり、「漠然としたアートの括りのなかから、自分にとっての特別なアートを選び出すとはどういうことか」ということ——。たとえば、アートを選ぶためにはアートと他を区別する括り(境界線)が見えなければならず、紹介するアートを用意できるということは、自明ではないその線引きを自発的に内的に決定している、ということに他ならない。そのような視点を、披露された言葉から感じた。	“さがそうとなると、見えなくなる” “つかまえようとすると、逃げていく”

7	M さん	<p>【パブロ・ピカソ(1881-1973)の絵画作品3つ】</p> <p>「彫刻家」(1931)…モデル/マリー・テレーズ</p> <p>「窓の前に座る女」(1937)…モデル/マリー・テレーズ</p> <p>「ドラ・マールの肖像」(1937)…モデル/ドラ・マール</p> <p>紹介者は、西洋近現代絵画に大きく聳える巨匠の作品について語った。これらの作品が書かれた頃、ピカソは妻の他にモデルとなった二人の女性と同時に交際を重ねていた。恋多き人であるピカソにとって、そうした恋の情熱が創作にどれほど寄与していたのかという点について紹介者は、「興味深い問題である」と話した。その上でピカソが描いたこれら3枚の肖像画には「描かれた女性の内面がそれぞれうっすらと出されている」とも語った。それを可能とした巨匠の筆力/眼力が、現在のわれわれから見てピカソの絵を「ふつう」だと感じさせてしまうほど、「決定的に新しい感性を作ってしまったのではないかと述べて紹介を締めくくった。</p>	<p>“恋(情熱)と創作の関係”</p> <p>“(後世)評価できるポイントがある、ということ”</p> <p>“時代を画す”</p>
---	------	--	---

【開催概要】

《朝さるん》原則、毎月第2木曜日(但し1月は第3木曜日) → 6/12 <「問い」の一步先へ(3完)/『すべて真夜中の恋人たち』川上未映子

《夜さるん》原則、2月、5月、8月、11月の第3金曜日 → 8/15 第11夜(詳細未定)

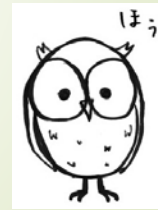
<http://salon-public.com/>



What is (an) art?

～夜さろん 第10夜～

2014.5.16(Fri)



アーティスト・宮本博史
個展《self community 家族について (box archive)
など》を開催いたします。



34組の家族から集められた会話の記録音声やアンケート等と共に綴られる写真集。
この写真集には、さまざまな家族の営みに関する日用品が82点、原寸サイズで記録・印刷されています。
ぜひ、会場でご覧ください



【関連情報】 宮本博史個展

《self community 家族について (box archive) など》

- ・会期：2014年4月26日(土)～5月11日(日)11:30-19:00
- ・会場:つくるビル 1階
- ・火曜日休み

※5月10日(土)はSSS開催のため、展覧会は17:00 までです。ご注意ください。



-----スライドショー・トークイベント-----

SlideShowStudies (SSS) vol.3 宮本博史「M家の場合」

<http://kyoto-artbox.jp/event/19547/>

<http://www.tukuru.me/?p=2766>



スライドショーを新たな作品発表の形式として模索・研究するスタディーイベントSlideShowStudies (SSS) の第3回目を開催いたします。今回はアーティスト・宮本博史を招き、「M家の場合」と題して家族写真をテーマにスライド&トークショーを行います。

宮本博史は、自己と他者、人や物の関係性や記憶、存在をテーマに、記録や収集物をもとにインスタレーションやパフォーマンス、映像、音作品、アートプロジェクト型作品を制作・発表してきました。

宮本作品において、これまで一貫して素材となってきたのが「家族」です。宮本は、自身や家族にまつわる生活の痕跡や営みを記録・収集し、それらを素材に作品発表を行ってきました。近年は、他の家族も巻き込み、家族の会話やおふくろの味の収集・記録にも取り組んでいます。私事と公共の境界を越えた作品は、哲学的、文化人類学的なアプローチも相まって、家族（観）の多様さを浮かび上がらせませす。家族（観）を取り巻く環境や社会制度、在り様が変化、崩壊している現代だからこそ、家族とは何なのか見る者に投げかけています。

SSS vol.3「M家の場合」では、M家の家族写真をM家の人々の語りとともにスライドショーを行います。M家の家族写真を、他者である観客とともに見ること。その時見る写真は、M家の写真でありながら、わたしやあなたの家族写真なのかもしれません。母の日の前日、ご家族揃ってお越しください。M家とともにお待ちしております。

日時：2014年5月10日(土) 18:00～ (17:45開場)

出演：宮本亘(自営業) × 宮本伸子(専業主婦) × 宮本博史(アーティスト) × 平田剛志(SlideShowStudies)

会場：つくるビル 2階 マルニアトリエカフェ (京都市下京区五条通新町西入西錆屋町25番地)



家族について、すでにさまざまな議論や研究が社会学者や評論家たちによってなされてきた。しかし、自分自身の家族をかえりみると、時代の変化をうつつし出すような先鋭的な課題を抱えているわけでもなければ、逆に一般論でひとくりにされてしまうほど平均的というわけでもない。それとなく特殊で、どこかしらフツーな部分を持ち合わせている私の家族。

宮本博史の《self community 家族について(box archive)》は、そうした家族の会話を録音したCD 3枚と、録音後に記入されたアンケート9家族分、そしてネジ止めされた129ページの写真集に、新聞紙で作られた封筒に入った、写真集のページ50枚で構成されている。各CDの収録内容は25,31,23件で、合計時間は3時間18分43秒。3枚のCDは、記入済みのアンケート用紙で折られた紙ジャケ(?)に入っているから、アンケートは合計12家族分と言うべきか。つぶさに見てみると、録音の中で一番古いものは2006年1月25日(大阪)、最も新しいものは2013年6月23日(石川)である。音源提供者欄に記載されている名前は全部で29名分(アンケートの質問のひとつが名前表記の可否)であるから、実際にはもっとたくさんさんの家族の会話が収録されていると想像される。

これらの会話を聞くともなく聞き、写真集をめくりながら、ときおり挿入されるトルストイやフォーコー、堺利彦や宮本常一といった人びとの著作や、家族を主題とした書籍からの引用が導きの糸となって、わたしたちは私たち自身の家族がいま現在、この家族の「星団」のどのあたりに位置するかを繰り返し見いだすことになるだろう。それはarchiveの機能であり可能性である。美術館用というよりは家庭用として構想されたこのアーカイブは、私たちの祖母の世代が大切なものを保管していた菓子缶に入れられている。そのたまたま目を目の端で捉えつつ、家族の成員それぞれが年を重ねていく様子をいつくしみたい。

藤川 哲 (美術史家 / 山口大学人文学科教授)



宮本博史 MIYAMOTO Hiroshi

1978年大阪生まれ、大阪・東京在住。

人々の営みに関するでろうさまざまなことからの関係性やそれらのかたちを、てつがく的観点で捉えようと試みている。例えば、ホームムービーの発掘と公開→保存→活用、自宅での展覧会、障がいのある人とのコラボレーション等々を通じて。「どこからどこまでが私事の範囲なのか、気になっています。」

-主なグループ展-

- 2013年 「アートピクニックvol.3 マイホームユアホーム」 (芦屋市立美術博物館/兵庫)
- 2013年 「HAPPY SPOT NARA 2012-2013」 (奈良県文化会館/奈良)
- 2010年 「Art Court Frontier 2010 #8」 (ARTCOURT Gallery/大阪)
- 2009年 「福岡アジア美術トリエンナーレ2009」 (福岡アジア美術館/福岡)
- ※AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]にて参加
- 2008年 「犬島時間」 (犬島/岡山)

-論文-

- 2009年 『締まらないアートの可能性』 共著: 西川勝 (『Communication-Design 2』 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター/大阪大学出版会)

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/8308/1/cdob_02_171.pdf



あなた自身からぬけだしなさい。
 町を歩くあなたを見なさい。
 あなたを石につまづかせ、転ばせなさい。
 それを見守りなさい。
 自分を見ている他人たちを見守りなさい。
 あなたがどんなふう to 転ぶのか
 注意深く観察しなさい。
 どのくらい時間がかかるのか
 どんなリズムで転ぶのかを
 スローモーション・フィルムを見るように
 観察しなさい。



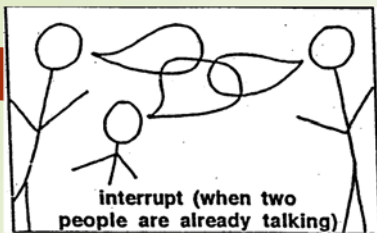
想像しなさい。
 千の太陽が いっぺんに空にあるところを。
 一時間かかやかせなさい。
 それから少しずつ太陽たちを 空へ溶けこませなさい。
 ツナ・サンドウィッチをひとつ作り
 食べなさい。



ある金額のドルを選びなさい。
 そして想像しなさい。
 A その金額で買える すべての物のことを。
 ・想像しなさい。
 B その金額で買えない すべての物のことを。
 一枚の紙にそれを書き出しなさい。



—YOKO ONO “グレープフルーツ・ジュース”



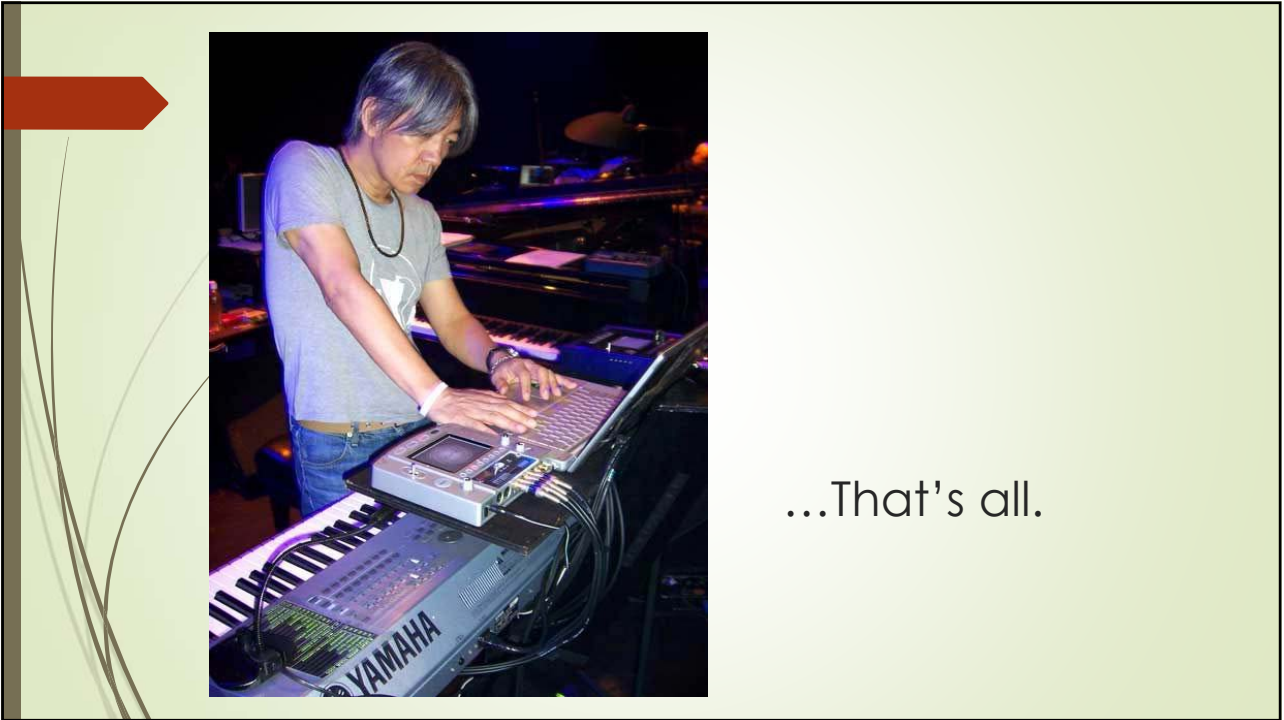
あなたが何を言っているのかわからない
 でもあなたが何を言いたいのかはわかる

私はあなたの愛に依存しない
 あなたとの愛を発明するのだ

これは、世の中のコードに合わせるためのディシプリン
 私の目に映るシグナルの暴力

—Dumb Type “S/N”





...That's all.